

◇横浜善光寺留学僧育英会◇

第十回育英生に辞令交付

—— 開山忌と理事長母堂三回忌厳修 ——

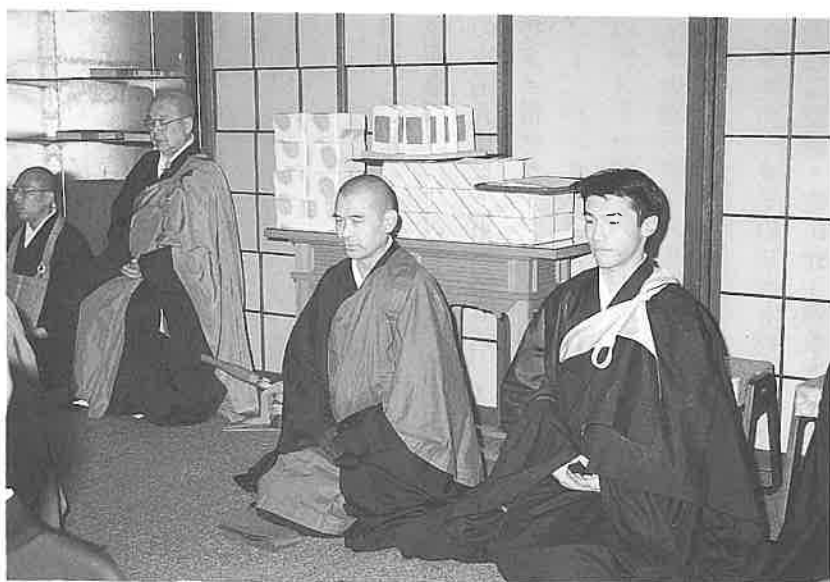
横浜善光寺留学僧育英会は二月五日午後二時から、第十回育英生九人の辞令交付式を開催し、併せて、東京・駒込吉祥寺の岩本昭典住職を導師に拝請して、開山忌と黒田理事長母堂・黒田嘉刀自三回忌を善光寺釈迦殿で厳修しました。

九人の育英生

第十回育英生九人は九カ国二十三人の応募者の中から審査選考され、これにより第一回から第十回までに派遣または受け入れた育英生は十

五カ国・五十六人になりました。

今回採用された育英生は、愛知学院大学に留学の中国人比丘・嘉木揚凱朝、スリランカに留学のタイ僧プラ・シャーンシャイ・キットイワソ、バンングラデシュから愛知学院大学へ留学のデイリップ・クマール・バルア、インドのプーナ大学へ留学の高野山真言宗僧侶・脇領至弘、駒澤大学大学院に留学のスリランカ僧サンガ・ラタナ、タイのワットパクナムに安居修行の天台宗僧侶・碓雄伸、佛教大学大学院に留学



の韓国人尼僧・孫順鎬（能仁）、龍谷大学大学院に留学の韓国人尼僧・金英子（法受）、立正大学大学院に留学の王文雄（台湾）の九氏です。

嘉木揚師は北京の黄帽派チベット佛教寺院「雍和宮」で出家得度し、中国西藏語学部高級佛学院を卒業。「雍和宮」で漢語・チベット語の佛教經典と佛教の教師を務めています。チベット密教についての研究をさらに深めるために愛知学院大学に研究留学。「佛法を弘め研究するとともに、東西の密教交流を深めるために努力したい」と意欲を燃やしています。

プラ・シャーンシャイ・キツテイワンソー師は、近畿大学通信教育部で日本語コースと商経学部商学科一回生を修了し、外語学校日本語講師、会社員などの経歴を持っていて、現在は全タイ国瞑想センター六十四支部の支部長です。スリランカ佛教大学の佛教学部に入學し、佛敎の理論と歴史を学ぶということです

デイリッパ・クマール・バルア氏は、ダッカ大学のサンスクリット・パーリ語学科を卒業し、さらに大学院修士課程を修了。「バングラデシュの上座部佛教と日本の大乘佛教を比較研究することにより、国内の密教との融和、団結をいかに強めていくかという大きな問題、さらにはイスラーム社会下での佛教伝道の方法等を学ぶことを主目的」に来日。日本では愛知県瀬戸市の曹洞宗宝泉寺（江川辰三住職）に寄宿し、曹洞禅の実践も体験するということです。

脇領師は高野山大学を卒業後、日本大学大学院を修了。現在、博士後期課程三年に在学中で、高野山真言宗南泉寺の副住職でもあります。インドでの佛教研究を志望し、プーナ大学のサンスクリット高等研究所に研究生として入学します。

サンガ・ラタナ師は、スリランカのアマダールプラ・ビック大学の佛教学部助教授で、昨年、



私費留学生として来日し、駒澤大学大学院の研究者として大乘佛教の菩薩について研究しており、現在は博士論文に取り組んでいるところである。

碓師は皇学館大学の神道学科を卒業後、大阪護国神社、式内の堤根神社に奉職し、さらに京都の天台宗毘沙門堂門跡に入って僧籍を取得した異色の経歴をもっています。現在は那智山青岸渡寺に奉職中ですが、「アジア的な規模で宗教の意味を考え、本来の佛教徒としての修行がしたい」とタイで上座部佛教を学ぶ決意に及びました。

孫師は韓国の東国大学校僧伽学科を卒業後、日本の佛教大学社会福祉学科に入学し卒業。

さらに同大学院社会学研究科へ進み、修士課程を修了後、博士課程で学業に専念しています。修了後は母国の社会福祉事業に携わりたいとの

願いをもっています。

金師は、東国大学校禅学科、雲門寺僧伽大学を卒業し来日。昨年、龍谷大学大学院修士課程に入学し、唯識学の研究を続けています。東国大学の卒業論文テーマは「佛教の孝倫理について」で、教育学を学ぶうちに深層心理に興味を抱いて唯識学に行き当たり、今後は、博士課程に進んで唯識学と西洋心理との比較研究を試みたいとの熱意に燃えています。

称賛と激励の言葉

黒田理事長から育英生に辞令と記念品が手渡された後、吉祥寺の岩本ご住職が善光寺開山棟庵白純大和尚との浅からぬ因縁を偲びながら、「白純老師には二十年前から辱知道交の御縁を頂戴し、現方丈様にも引き続いて法縁をいただいている。その関係で日本の法要と育英会の辞令交付式という佛法にとって意義深い催しに参

画させていただいた。白純老師は温かく心の深い、お人柄の大きさ深さを感じさせる方で、私もその法悦の一端を享受させていただいた一人だ。白純老師が全日本佛教会の組織局長のとき、その下にいた者として、その御縁を今さらながら噛みしめている。現方丈様の育英資金交付については、一言では言い尽くせぬ御苦勞がおありと思う。一回や二回のことであればできなくもない。しかし、聞けばこれを十回、六十人になんなんとする佛道探求の学徒を世界に出しておられることに打たれ、その御努力に衷心より敬意を表する。恵まれた寺に育った子供は寺の庇護のもとに育つひ弱さがあるともいわれる。しかし、黒田家においては白純老師、そして北堂・嘉刀自の御指導のよきこともさることながら、それぞれに独立独歩の御活躍をしておられる。ことに北堂嘉刀自が亡くなるまで不断の努力を一貫された成果が、善光寺様においては今

日この通りだ。本日は開山白純老師の風姿を偲ぶとともに、北堂様の風貌も併せ思いつつ献香させていただいた」と挨拶されました。

善光寺役員を代表して挨拶した伊藤喜三郎氏は、「本日は感慨無量のものがある。方丈様と初めて知り合ったのはインド佛蹟を巡拝した時、共にホテルで寝起きしながら佛縁をいただいた。方丈様のスケールの大きさ、世に尽くすという激しい情熱に常日頃心打たれている。いま地球に何が必要かという宗教だ。この育英会は、宗派にかかわらず海外へ留学僧を派遣している。この方丈様のように生きていくと、地球上が温かいものになる。それには行動しなければならぬ。方丈様がそれを示してくれて嬉しい。皆さんもその意思を継いでいただきたい」と参列した留学僧たちに語りかけました。

佐藤俊明常務理事が育英会の十年の歩みと第十回育英生決定の経過を報告し、十年間に黒田

理事長、佐藤常務理事らが訪問した世界十カ国の訪問記と育英生の論文集・第二集が近く発刊予定であることを発表しました。

式典後の懇親会では、育英会の顧問である横浜・観音寺の住職梅田文丈老師（曹洞宗神奈川県第二宗務所長）が挨拶し、「本日は法友として参った。役員のお席を汚す者としてお礼の言葉を述べたい」として、黒田理事長の道業に敬意を表しました。また、理事の医学博士・中村治雄氏が開山白純大和尚に主治医として接した逸話を披露し、黒田理事長の行動力を称えました。曹洞宗宗議会議員で黒田理事長と同級の法友である三浦市・本瑞寺住職洞外文隆老師は、六百年の伝統をもつ自坊とゼロから出発した善光寺の有り様とを比較しつつ、「宗門が挙げてやらねばならぬことを黒田方丈は一人で行っている。彼一人に任せてはおけない」と、称賛と激励を込めて献盃の発声を行いました。

この日集まった育英生たちは、「育英会の目的を考えながら勉強していきたい」「育英金を無駄にしないよう大切に生かしたい」「勉強が終わった後は、黒田方丈様のように、社会のために尽くして働きたい」など、それぞれに決意と感謝の言葉を述べていました。

